

話題提供 3：柳澤好昭 「学習環境と学習活動」

柳澤 国立国語研究所研修室の柳澤と申します。よろしくお願いいいたします。前のお二方が教育実践の中で、いくつかの問題点の発見、解決に向かって活動されたということで、私の方は、観察者として小学校の事例を見ながらこういうことが言えるのではないかと考えたことを話させていただきます。事例の大部分は、今日御出席いただいています野山さん、それから今日は来られませんでした舟木圭子さん、あるいは梅田エリカさんという、実際に太田市で調査に関わった人たちの資料をかなり使わせていただいております。

環境の移行

小学校の子どもたちを約 2 年間ずっと調査者たちが観察をしてきた中で得られたデータをよく見ていくと、外国人児童生徒だけの問題ではない、例えば、転校生の問題、登校拒否児の問題などとも大きく関係することがあるのではないかという気がしています。一番大きい要素として環境の移行ということがあります。今まではバランスの取れた生活構造を作り上げてきたわけです。これは、親があるいは社会があるいは子ども自身が作り上げてきました。ところが、自分が望むと望まないに関わらず、日本滞在という外的な環境の変化に見舞われるわけです。その中で、個人をどう位置づけていくか、個人の中で内的な変化をどう進めていき、また捉えていくか。それから、環境移行に伴う危機、あるいは攻撃や防御といったことをどう乗り越えていくか。ここでは適応ということばが適切かどうか分からないのですが、適応行動と書いてあります。自分なりにどう対処、対処行動としていくのかということが大きなポイントとして考えられるのではないかと思います。このような中に、日本語によるコミュニケーションの問題や、母語によるコミュニケーションの問題などが絡んでくるのではないか。外的環境の変化ということを経験した子どもの場合で言えば、親にしても子ども自身にしても、ブラジルにいた時の生活観なり、人生観なりがあったわけですが、日本に来た時に親も子どももある程度変わってくるのです。例えば、今は日本の方が友達が多いから日本にいたいと思う子どもなど、ある環境が変化した段階で、いろいろな出来事がもたらされます。その変化がまた他の人に対して、またさらに変化をもたらすということになってきます。

また、日本人の児童生徒の側から見ると、外国人児童生徒の方の能力や経験が低いという捉え方をすることがあります。それから、日本語ができない、予備知識がないということで、子ども扱いすることがある。実は、これはよく日本語教師が日本語のできない成人学習者に対してもすることがあります。日本語ができないというだけでパイプを作ること避けてしまう。そういうような教室の中での環境問題、教室外での環境問題が、先ほどの図でいう個人と個人の中での内的変化にどう絡んでいくかということと、環境移行に伴う危機意識をディフェンシブにとるかどうかが非常に大きな問題だと思います。

規範と集団圧力

これらを助長する要素として、その次に書いてあります、「社会的影響過程」というのがあると思います。学校教育の場合、教室の中で一つの集団を形成するわけですが、多くの場合外国人児童生徒は、その中で少数派です。他が三十何人日本人という場合に、先にコミュニティーを作っている日本人側の方に、規範というものができています。この規範は、目に見える場合はいいのですけれども、目に見えない場合、本人たちも知らず知らずの場合には、摩擦の根因となります。例えば、先生と生徒の関係の中で、「わかった?」「質問ある人?」と言う場面はよくあります。これはなかなか難しい日本語表現であるにも関わらず、言ってしまうということは、日本語で理解しあえるという前提があるから成り立つわけです。他の例を挙げると、休み時間の利用の仕方は国によって違います。これは比較をすれば目に見えてくるのですけれども、試験でダメなところをバツにするとか、マルにするとかという表示の仕方も国によって違います。ハンガリーなどでは試験の成績をつける時には名前を隠さなければいけないということがあります。試験の採点の仕方も違ってきます。目にみえるものと見えないものとの境目のもの、見えたり見えなかったりするようなものが厄介です。しかし、一方で次のような例もあります。外国人児童生徒が自分の国の通知表を持っていたのですが、これが日本の子どもたちにとってみると格好いいらしいのです。子どもたちはただ見栄えだけで格好いいというわけですが、格好いいものものを持っている人はいい人だ、というような自分たちが作っている勝手なルールをどこまで意識できるだろうか。また、友達をどう捉えていくか、あるいは友達の作り方をどう捉えるのか。コミュニケーション能力とは、このようなことを含むのではないのでしょうか。太田市の場合で言いますと、同じ小学校、あるいは同じ中学校から上に上がってくる場合があります。その子たちはもう関係ができています。小学校の時に付いたあだ名がそのまま中学校に来て通用してしまうように。このような関係や環境を嫌だという人もいるでしょうし、それで友人関係ができてしまう人もいるでしょう。ただ単に、側にいるからもう友達なんだととる人と、そうでない人もいます。このようなことは、何かの刺激がないとなかなか気がつかないことでしょう。規範とか、集団からの無形・有形のプレッシャーも同じです。外国人児童・生徒、転校生などにも相通ずるものがあると思うのです。

同調

さて、3ページの図(資料1)をご覧ください。「個人要因」と「集団要因」と「状況要因」と書いてあります。集団内の活動で、「いいや、あっちの言うこと聞いておこう、とりあえず、あっちの方がマジョリティーなのだから」というようなことが往々にして見られます。これは、同調というものです。例えば、日本人の生徒から言われたことはその通りだと思ってある外国人児童・生徒がそのまましました。実は先生から言われた指示をその日本人の生徒は勝手に解釈していて、意味、目的がちよっと違っていただけです。日本人生徒の方がよく知っているのだから、日本人生徒の方が多いいし、ここは日本の学校の教室でもあり、その通りにしたわけです。それから、これは日本人の生徒にもよく見られ

と思うのですが、皆が歌っている時に、口をパクパクして一見一緒に歌っているように見せる。本人の中でどれだけ意識をして同調をしているかもありますけれども、集団の方に合わせているわけです。これが、ある種の抑圧に繋がっていく、あるいは日本語に対する自分自身が持つプレッシャーなり偏見なりに繋がる可能性が大きいのです。

一方、「ブラジルに帰りたいか」という質問で、「ブラジルに帰りたくない。こっちがいい。一緒に遊べるから。物が豊富だから。いろいろなことができるから。」というふうに、自分の位置付けを見出すことを子どもたちは行ってもいます。頭の中でいろいろな葛藤が起きているのだらうなあと思います。

「学校で困ることは」という時に、「聞きたい時に聞き方が分からない」というのがあります。

援助行動

実は日本人の子どもたちも当然のことながら結構当たり前のごとく助けているのです。ただ、この助けには力関係が出てくるようです。また、助ける人ですが、クラスには三四十何人の日本人児童・生徒がいるわけですから、誰かが助けるだろうというムードがありません。気がついた人が助けるということなのですが、これは、ある意味での無責任に繋がる可能性があります。「おまえさん、助けてあげなさいよ。」とある生徒を指名すると、今度はその生徒があるプレッシャーを持ちます。援助というものをどうとらえるかによって、助けるということが力関係を生んでしまう。責任の分散を生んでしまう。教室で助けてもらうなり、自分で行動するなりする時、双方のインフォメーションギャップの理解、コミュニケーションする目的の理解が重要となります。その上でコミュニケーションをする道具として日本語が大きな要素となります。

社会的スキル

では「コミュニケーションとは何だ」というところです。捉え方の一つの視点として、ソーシャルスキル、社会的スキルという捉え方があります。これは、午後の後半の方でまた細かく触れる時間があると思いますので、そちらの方に回すつもりです。社会的スキルの習得、コミュニケーションする方略の習得においては、その場での「リラックス」ということが大きい要素と言えます。このリラックスというものはどういうふうにするのか。これは、現時点では、個々の努力に委ねられています。

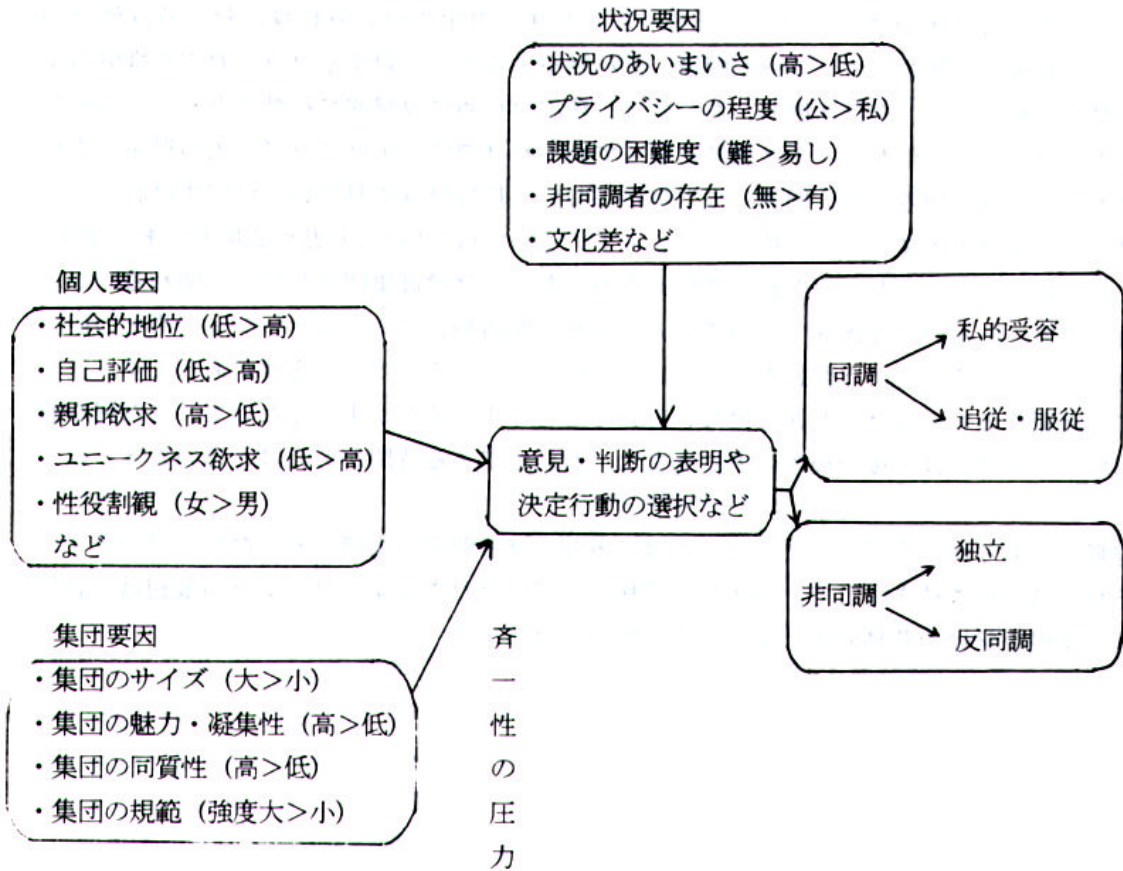
さて、教室の中で子どもたちが話す日本語について気がついたことがあります。一語文レベル、指示詞の多さ、単文レベルの多さです。いつ頃からそうなったと言えるのかと聞かれるとなかなか難しいところです。休み時間や先生の質問に答える時に単文、一語文レベルが多い、指示詞が多い。このような状況では、日本人児童に対して、外国人児童が話そうとした時、文脈依存が高くて、とてもやっていけない。そうすると、外国人児童が身につけるストラテジーの一つには、「分かった」「分からない」「うん」「いいえ」ということばの連発があります。そして、さらに会話が成り立たなくなっていきます。

自己評価維持

このような日本語によるコミュニケーション状況の中での自分自身に対する評価ということも大きな問題です。自分が間違っただ行動をすることに対する自分に対する嫌気のようなものがあって、自己防御的、あるいは、防御のために攻撃的な行動をとることがあります。自己への評価がマイナス思考になっていくわけです。実はブラジル人の児童・生徒は本来もう少し明るくて、間違っても気にしないと私は思っているのですが、自己評価をマイナスの方に維持してしまっているのではないかと、思える場面があります。これに対して、先生がどう関わっていくのか、あるいは学級集団としてどう関わるのか。教室内で、あるいは友達同士の中で個人の成熟の問題を、コミュニケーションやその能力をどうとらえるかという問題を、いろいろな側面からとらえていく必要があります。決して、言語そのものだけの問題ではないということです。時間が来ましたので、また何か質問なり、あるいは午後の後半の方にもまた、お話ができる時間があればと思います。以上です。

吉野 ありがとうございます。非常に多岐に渡る問題の指摘があったかと思います。それでは、引き続きまして、コメントに移らせていただきます。コメントの最初は、目黒区立東根小学校の花島先生、よろしくお願いたします。

資料 1



参考文献

太田市地域日本語教育推進委員会 (1 9 9 6) 「太田市日本語教育中間報告書」